放課後のプリズム

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
放課後のプリズム

【Ｎコード】
Ｎ７７１９Ｄ

【作者名】
徳次郎

【あらすじ】
何時の間にかギクシャクした関係になってしまった幼なじみのツカサと、再び同じ学校へ通うことを知ったサツキ。中学とは違う男女の明確な関係を幾つも目の当たりにして、サツキの心は焦る◆◆◆ツカサに彼女が出来る前に、コンプレックスだったメガネをどうにかして彼との距離を縮めたい……親友イズミの勧めでサツキはコンタクトレンズ専門店へ足を運ぶが……「はじめての×××。」企画作品。

【プロローグ】（前書き）

冒頭に紛らわしいセリフや描写がありますが、健全なお話です。
ご安心してお読み下さい。
『はじめての×××。』企画作品です。

【プロローグ】

――イタイ、イタイってば！
入らない、絶対入らないよっ。
彼女は両手のひらをギュッと握り締める。
「もう少し大きく開いて」
――ムリムリ……そんなんの恥ずかしいじゃんっ。
ダメダメ、入らない。
「大丈夫、最初はみんなそうですよ。でも、すぐに慣れるから」
――ダメだよ。痛いってば。もっとゆっくりして……こんなの慣れるわけないじゃん。痛すぎるよっ。
「どうします？　止める？」
彼女は一瞬の躊躇いの後「……入れてください」
「もっと大きく広げて」
彼女は唇を噛み締めて耐える。

「ほら、入りました」
「な、なんか変な感じ……」
「直ぐに慣れます」
「でも、イタイ」
「それも慣れますよ」
彼女は涙が止まらなかった。白い頬を滝のように雫が伝っていく。
瞬きをする度に、瞼がゴロゴロして痛みが走る。
「痛いです。やっぱりダメです……これ以上は」
「じゃあ、ハードは止めて、ソフトにしてみようか」
医師はそう言ってサツキの目から、慣れた手つきで素早くコンタクトレンズを取り外した。
――イタタタタタっ。
取り外す時も、眼球と瞼に痛みが走る。

目の周りの神経が敏感なのか、精神的なものなのか……

すぐに医師は、指先に乗せたレンズを差し出して

「こっちがソフトレンズです」

最初に見たハードレンズに比べると、コンタクトレンズとは思えないほどの大きさだ。

――デカっ！　こんな大きいの入んないよ。

「こ、これ入れるんですか？」

「薄いから大丈夫ですよ」

医師が再びサツキの瞼を押し広げる。

――痛ぁい。やっぱ痛いじゃん。

恐怖心が痛感神経を増幅させるのかもしれない。瞼に痛みが走る。

「はい、入りました」

サツキは素早く何度か瞬きをしてみる。

痛みは無かった。

――うわっ、全然違和感ないよ。イケルよ。これイイじゃん。これならあたしでも平気そう。

「どうですか？」

「あ、はい。全然大丈夫そうです」

医師は再びソフトレンズの長所と短所を説明する。

この時、購入はほぼ決定したと思った事だろう。

「じゃあ、度をあわせて見ましょう」

「えっ？　あ、あの……買うってまだ決めてないんですけど」

「大丈夫ですよ。処方せんに書き込む為に度をあわせるだけです。買うのはお店に戻ってからだから」

「そ、そうですか」

医師は笑顔で立ち上がると

「じゃあこちらへ」

最初に検査を受けた視力を測る機械の方へ、再び促す。

「そのあと、着け外しの練習してみましょう」

視力を測って細かな度数を調整した後、サツキは再び別室の椅子に腰掛けていた。
「そこで手を洗って下さい」
テーブルの横には小さくて清楚な洗面台が在る。
医師の指示に従って、サツキは消毒液を着けて少し丁寧に手を洗った。
「じゃあ、ちょっと拳を作ってみて」
――拳？　コンタクト外すのに拳？
そんな彼女の心配を他所に、医師はサツキの拳を眼球に見立てて取り外しのコツをレクチャーし始めた。
「黒目の部分を親指と人差し指で軽く押して、コンタクトを摘みます」
彼は笑顔で言った。
――眼球を指で摘む？
「あ、あの……目玉を指で押して平気なんですか？」
「実際に触れているのはコンタクトだから」
医師は優しい笑顔を崩さない。
サツキは目の前の鏡を覗き込んで、恐る恐る自分の目の中に指を差し込む。
――マジで？　このまま目玉を触るの？　ムリムリっ、目玉に触るなんてムリ。
「もっと目を開いて」
――ムリだよ。反射的に閉じちゃうよ。それが動物の防衛本能じゃないの。
サツキは必死で左手で右目をこじ開けて、右手で眼球を、いや、コンタクトレンズを摘もうとする。
「もう少し、大丈夫、取れますよ」
――あんたは年中やってるから簡単に言うんだよっ。
「あ、あの……取れないみたいです……」

「大丈夫、もう少し黒目を指で押して」
――自分の目玉を自分で押せるかって……
暫くの沈黙の中、彼女は必死にコンタクトを摘もうと全神経を右手の指先に注いだ。
「す、すいません。ムリそうです」
そう言いながらもサツキは必死で目玉を押して摘む動作をする。
しかし押し当てる力が弱いのか、なかなかコンタクトを摘めない。
だいたいコンタクトに触れている感覚がないから、どれをどう摘めばいいのか見当がつかないのだ。
「大丈夫、もう取れそうですよ」
医師の口調でそれが笑顔なのは解ったが、それが何の役に立つのか……
サツキは右目を見開いたまま苦笑する。
彼の笑顔の裏側に、くたびれた呆れ顔が浮かんだから。
もう直ぐも何も、本人にはまったく感覚がつかめない。
そして格闘することさらに１０数分……何かのはずみのように、指にコンタクトが挟まってきた。
医師が声を出して初めて成功した事を知る。
「そうですそうです、出ましたよ。ほら、簡単でしょ？」
――何処がだよ……
サツキは鏡越しに医師を見て、困惑と諦観（ていかん）の入り混じった微妙な苦笑いを浮かべる。
医師は相変わらず優しい笑顔で続けた
「さあ、今度は左ですよ」

【プロローグ】（後書き）

「放課後のプリズム」プロローグを読んでいただき有難うございます。

次回第１話は、明日ＵＰ予定です。

【1】いまも幼なじみ？

雨上がりの春の陽射しは眩しかった。
庭木の緑が風にざわめいて、草の匂いがした。
入学式の時にはまだ風が冷たくてカシミヤのマフラーをしていたはずなのに、ひと月も経たないうちに照りつける陽射しには確かな熱量を感じる。
朝の光がアスファルトの水溜りに反射して、如月（きさらぎ）サツキは瞳を細める。
「あ、おはよう」
学校へ行く為に家を出た彼女は、二軒隣の家から出て来た片蔭（かたかげ）ツカサに声をかけて手を振った。
ツカサもサツキも幼稚園の頃にこの住宅街へ越して来た。
当然、二人は同じ幼稚園、同じ小学校、同じ中学へ通った。
幼い頃はよく一緒に遊んだが、中学頃からほとんど会話も交わさなくなって以来、こうしてサツキが声をかける程度だ。
しかし、彼は決まってチラリとサツキを見ると、軽く手を上げて何も言わない。
それでも彼女がツカサに声をかけるのは、完全に縁が切れるのが怖かったから。
立ち止まって声をかけたサツキの目の前を、今日もツカサは無言で通り過ぎる。
微かな視線と小さく上げる手が、せめてもの救いだ。
サツキは彼が完全に通り過ぎてから、ゆっくりと歩き出す。
彼の背中を見つめながら。
早咲きの桜はもう散り始めて、道端には桃色の小さな吹き溜まりが出来ていた。

高校は別になると思っていた。
ツカサは成績がよかったので、市内一の進学校へ行くと思っていたのだ。
そこは男子校なので、サツキがいくら勉強を頑張っても絶対いけない場所だった。
彼女だってちょっと、いやかなり頑張れば試験に合格できる偏差値を持っていたが、それだけではどうにもならない。
噂によると体力的にも男性にひけを取らなければ女子でも入学できるという話だ。
しかし、どんなに努力したって男子高校生と同等の運動能力は、凡人のサツキには無理だった。
それ以前に、何百人という中の紅一点なんてありえないと思った。
隣接した場所には、ほぼ同じ学力で入れる女子高がある。その学校は、男子校との交流が盛んな事でも有名だ。
つまり、市内ではこの二校が仲良くトップレベルに存在するわけだが……
サツキは結局あまり努力を必要としない安全第一とも言うべき高校を選んだ。
それでも、市内では3番手。
そしてその高校は共学だ。
サツキの母親は、ツカサの母親と今も普通に交流が在る。だから、ツカサの進路も以前から知っているようでは在った。
でも訊けない……思春期を迎えたサツキには、幼なじみと云えども男の子の事を親に訊くのは逡巡する。
中学の卒業式は淋しいものだった。
もう、学校でツカサの姿を見る事はできない。
たとえクラスが違っても、廊下で見かけたりグラウンドで見かけたり……
ツカサは中学の頃から陸上部にいた。
放課後、彼の走る姿をこっそり教室のベランダから見るのが好き

だった。
西日がグランドを琥珀色に染める中で、前だけを見つめて走る彼の姿が……
そんな日常の空気を共にしているだけで、安堵していた。
でも高校が違えば、当然家を出る時間も違ってくる。朝の挨拶さえ交わさなくなって、いづれ全く知らない誰かに変わってゆくだろう。
これで彼との縁も完全に途切れてしまいそうで、サツキの高校生活への希望は限りなく暗たんとしたものだった。

しかし高校の入学式。
新入生が沸き立つ雑踏の中、サツキは隣のクラスにツカサの姿を見て驚いた。
まさか、同じ高校を受けていたなんて知らなかったのだ。
「あれ？　ツカサ君じゃない？」
イズミが声をだした「成和に行ったんじゃないんだ」
「なんで、ここに来たんだろ」
とハルカも思わず首を傾げるが、サツキは何も言わなかった。
いたって冷静を装って、二人を自分たちの教室へ促す。
本当は嬉しくて笑みが零れそうだったが、頬を引き攣らせて堪えた。それを周囲に……イズミやハルカにさえ気付かれるのが嫌だったから。
どうして受験の時に気づかなかったのか……
中3の時はクラスが違っていたし、受験をする教室も違っていたのだろう。
しかし、それだけではない。
まさか彼が同じ受験会場にいるなんて思っていなかった。
さらにサツキは肝心な場所では上がり症だった。
試験当日は、イズミとハルカと片時も離れないようにして気持ちを解きほぐした。

だから周囲に他の誰がいたかなんて、正直全く覚えていない。
と言うより、周囲の人を見渡している余裕など無かったのだ。
でも……じゃあ、なんで今朝会わなかったの……？
サツキは入学式の朝、イズミやハルカと待ち合わせるために、かなり早い時間に家を出た事を思い出した。
それ以来毎日ではないが、よく朝に彼を見かける。
学校では特に声もかけないが、朝だけはツカサの姿に声をかけるのだ。
こうして幼稚園からの同級生は、高校生活まで共に過ごす事となった。

「サツキ、部活もう決めた？」
教室へ入ると、毎朝イズミが一番に声をかけてくる。
春の真新しいクラスは何となく不慣れでちょっぴりぎこちなくて……窓から入る朝の陽射しは何時も眩しくて。
「まだ決めてない。イズミは？」
「あたし、サックスでも吹いてみよっかなぁ」
「マジで？」

【1】いまも幼なじみ？（後書き）

本編【第2話】は明日Up予定です。
それ以降は、1日置きのUp予定です。
下記のHPにて春企画作品が次々UPされています。
ケータイ用
http://firstxxx.web.fc2.com/
PC用
http://firstxxx.web.fc2.com/index2.html

【2】それって初体験？（前書き）

第2話は少し長いです。
読みづらい場合は、数回に分けてお読み下さい。

【2】それって初体験？

新学期が始まってあっと言う間の４週間。
麗らかな日常は、どこか平穏で何故か焦燥感に満ちている。
サツキには判っていた。
高校へ入ると、男女の関係がよりハッキリしてくる。
もちろん仲のいい異性の友人もそれなりにできる。
しかしそんな事で満足している場合じゃないのだ……
穏やかな春風に誘われるように、それ以上の関係になる連中を幾人も見かけた。
やっぱり中学とは違う、明らかな男と女の付き合い……
確かに中学の時だって、下校時に手を繋ぐカップルはいた。
もちろん、サツキには手の届かない光景だったが……
だが高校へ通いだすと、それ以上の関係という連中の噂話が、あちらこちらで飛び交う。
このままでは、何れツカサにも明確な彼女が出来てしまう。そうなれば、自分の想いは永遠に届かないだろう。
手遅れになる前に何か行動を起こさなければ……このままではダメだ。
しかし、サツキにはひとつ大きなコンプレックスがある。
視力が悪い為、小学校５年の時からメガネを使用しているのだ。
初めてメガネをかけて学校へ行った時、同じクラスにはツカサがいた。
そして男子の誰かが冗談で言った。
「如月（きさらぎ）、教育ババアみてえ」
その時サツキは笑って受けながしたが、心は酷く傷ついた。
自分のキャラ的リアクションは、笑って受けるしかなかった。それをよく判っていた。
その後も、時折男子は彼女をメガネババアなどとふざけて呼んだ。

メガネってそんなふうに見えるの？　そんなオバサンみたいに見えちゃうの？

小学生がかける初めてのメガネと言う事もあって、細いフレームの地味なものだった。

母親は銀色を薦めたが、サツキは黒を選んだ。

それでも細身の黒いフレームは、誰かには教育ママアに見えたのだろう。

その頃から、ツカサはサツキの顔をまともに見なくなったような気がする。

まだいろいろ話もしたし、登下校も一緒の事が多かったが、彼の視線はサツキの瞳の中には入ってこなくなった。

メガネのレンズが彼の視線を妨げるのだろうか……

違う……あたしのメガネ姿が嫌いなんだ。

やっぱり、メガネなんてかけるとブス？　そんなあたしと一緒にいるのはイヤ？

サツキは自分の視力の低下を恨んだ。

普段の生活には全く支障は無い。

親友もいるし、クラスでは男女隔てなく話しもできる。

どちらかと言えば、サツキは明るく活発な方だろう。

しかし……この問題に関して、メガネ姿は彼女の活発な行動力を殺(そ)いでしまう。

「サツキ、どうしたの？　ぼうっとして」

校舎の窓から外を見つめるサツキに声をかけてきたのは中学からの親友、涼風(すずかぜ)イズミ。

彼女はショートカットを風に靡かせてパタパタ駆けるような、サツキに輪をかけた明るさで元気一番の印象だが、実は文化系だ。

「昨日どうだった？」

昨日……そう、サツキは彼女に強く勧められてコンタクトレンズの専門店へ行った。
初めてのコンタクトに挑戦するべく、朝母親に出してもらった保険証を握りしめて勇んで向ったはずだった。
実はイズミは中学で知り合った時、既にコンタクトをしていたのだ。
その自然な風貌に、サツキは多少羨んだことも在る。
しかし目の中に異物を入れたまま生活するなんて、サツキにはどうにも抵抗があった。
「全然平気だよ。直ぐに慣れるって」イズミはそう言って笑った。
最近では休みの日はカラーの入ったコンタクトを着けている。
サツキは窓枠に肘を着いたまま、空を見上げた。
もちろんメガネのレンズ越しに……
伸びやかな虚空の向こうに、シルクのような雲が浮かんでいる。
「それがさ、やっぱあたしにはムリだよ」
「えっ？　じゃあ、買わなかったの？」
イズミはいかにも信じられないという言い方だ。
「うん……目が痛くて開けられない」
「ソフトは平気でしょ？」
「そうなんだけど……入れたコンタクトがどうしても取り出せなくてさ」
「ええっ？　そんなの直ぐ慣れるよ」
「あたしにはムリだよ。自分で判るもん」
イズミは溜息をついて「やっぱ、あたしがついて行けばよかった」
「そんな事しても変わらないよ」
イズミはそれを聞くと、サツキの手を掴んでトイレに引っ張って行った。
「ていうか、サツキ髪切った？」
「うん。昨日切った……」
廊下を歩きながらサツキが応える。

「なんでコンタクト買わないで髪とか切ってんの？」
「いや、それとコレは関係ないし……」
トイレのドアを開けて中に入ると、洗面所の鏡の前でイズミは
「いい、見てなよ」
そう言うが早いか、あっという間に自分の瞳からコンタクトレンズを外してみせる。
「どう？　簡単だよ。何回かやれば直ぐ慣れるって」
指先に乗ったコンタクトをサツキの目の前に差し出した。
彼女が使っているのも、ソフトレンズだった。
「大きいから最初は大変だけど、毎日やれば直ぐ慣れるって」
そう言いながら、彼女はさり気ない動作でコンタクトを瞳に戻す。
「ツカサ君ともっと近づきたいんでしょ？」
「ち、近づきたいって言うか……」
「コクりたいっ！」イズミが笑って言う。
「こ、コク……そんなの……」
「何よ、今更。少しは当たって砕けてみなよ」
「いや……砕けるのは嫌なんだけど……」
イズミは洗面台に寄りかかって
「だいたいメガネが悪いとはいわないけど、キスの時邪魔になると思わない？」
「えっ？　キスの時邪魔になるの？」
サツキも洗面台に寄りかかる。
「だって、彼の顔が近づいてメガネのフレームが頬に食い込んだらイヤじゃない？」
「そ、そんな事ある？」
「判んないじゃない。男は不意にしてくる時だってあるんだよ」
イズミは洗面台の空きスペースにぽんと飛び乗るように腰掛けると
「アンタがビックリした拍子に、彼の目にメガネが刺さったらどうする？」
冗談半分にそう言って笑う。

サツキは思わずメガネを外して、マジマジとそれを見つめた。
いま使用しているのは、グレーのセルフレームで最近流行の横長の角型タイプだ。
「ほら、あんたはメガネが無い方が絶対イケてるよ」
イズミは自分より長いサツキの髪の毛の先を摘んで揺すった。
「そ、そうかな」
サツキは振り向いて鏡を覗き込む。
ぼんやりと自分の顔が映るのが見えるだけなので、あまりピンとこない。
イズミは、サツキがツカサに対して特別な感情がある事を中学の時から知っていた。
そしてサツキが意外とかわいい顔をしている事も。
実際メガネをかけていても、それはあまり変わらないと思っている。
ただ、サツキ自身がコンタクトを着けたがっている事を知った彼女は、わざとメガネが無い方がいいと背中を後押ししているのだ。
実際コンタクトにしてメガネのコンプレックスから開放され、積極的になったり性格が明るくなったりする場合はある。
サツキは何時も明るいので日常での心配は要らないのだが、ヤッパリ友達として親友の恋は実らせてあげたい。
メガネを取る事でそれが少しでも叶うなら。

「だいたい最初は誰でも痛いんだから」
イズミは宙に浮いた足をブラつかせる。
「初めてでも、痛くない人は痛くないって言ってたよ」
「そりゃ、あたしもあんまり痛くは感じなかったけどさ……」
トイレのドアが開いてハルカが入って来た。
「――あっ、あたしも、あんまり痛く無かったよ」
サツキとイズミはポカンと彼女を見つめる。
ハルカの視力は両目共に1，5だ。二人共それを知っている。

「あ、あんた目悪く無いじゃん……」
イズミが言う。
「あれ？　初体験の話じゃなかったの？」
笑うハルカを、サツキはメガネをかけながら見つめた。
イズミは思わず、洗面台から飛び降りて
「あ、あんた、いつの間にしたの？」
「えっ？　春休み……だけど」
ハルカはそう言ってから、詰め寄るイズミに向って
「……あれ？　何の話？」

【2】それって初体験？（後書き）

次回【第3話】更新は3／5未明頃になる予定です。

【3】視線の行方

学校と駅の途中にあるアプリコットの木が白い花を咲かせて甘く香り、澄んだ蒼穹からエジプトブルーの風が灌ぐ。

新興住宅街や大型店舗が増えても、まだまだ緑豊かな町には五感で堪能する季節感があった。

学校から家までは電車で二駅。時間にして１０分ちょっとだった。

小さな運河を越える以外は、田んぼと林と住宅街しか見えない。

遠くにモノレールの高架が見えるが、それはいかにも別世界の産物だ。

この日、サツキが帰りの電車に乗り込んでぼんやりと発車メロディーを聞いてると、ドアが閉まる瞬間誰かが勢いよく飛び込んできた。

彼女はビックリして息を呑み思わず後ずさりすると、目の前にいるその姿に再び驚く。

油断していたので、呆けた顔を引き締めた。

「い、今、帰り？」

出来るだけさり気なく声をかける。

ツカサはどれだけ走って来たのか、大きく肩で息をつきながら苦しそうに

「あ、ああ」

単線の電車は、一本逃すと２０分以上は待たなければならない。

彼はサツキの隣でドア窓に向って立つと、何度も深呼吸をして息を整えた。

何時も通り過ぎるだけの彼が、今日は自分の横で立ち止まった事がサツキは嬉しかった。

「大丈夫？　凄い汗だよ」

サツキは出来るだけ平静を保って思考を巡らせた。

ハンカチだ……こんな時はハンカチを出すのよ。男の子はハンカ

チなんて持ってないんだから。
サツキは制服のポケットから水色のハンカチを取り出すが、同時にツカサは自分のカバンからスポーツタオルを取り出して額に当てた。
彼女は差し出そうとした手をそっと下ろして、ハンカチを再びポケットに入れる。
チラリとツカサの視線がサツキに向いた。
汗で前髪が額にくっついて、それをタオルで拭っている。
サツキは反射的に不自然な笑みを浮かべて、咳払いなどをした。
「た、タオル持ってると、便利だね」
彼は陸上部なのだから、スポーツタオルを持っているのも当然だった。
「ああ、俺汗っかきだろ。部活とは別に持ち歩いてる」
「そ、そうだったね」
サツキの顔には自然な笑顔がこぼれた。
だろ…という語尾。
それは、自分の事をよく知る相手と認識しているからこそ使う言葉だ。
彼女には、その語尾が特別なものに聞こえた。
途端に気持ちが和らいで、入学してからずっと言いたかった事、話したかった事が頭の中を過る。
「今更だけど、ビックリしたよ」
「何が？」
「ツカサは成和第一に行くと思ってたから」
成和第一高校は、市内一の成績を有する男子高校だ。
ツカサは再びチラリとサツキを見て、直ぐに窓の外へ視線を戻す。
「あ、ああ。受験勉強面倒くさくてさ。ちょっとサボっても入れる所に決めたんだ」
「そう……あたしと同じだね」
サツキもチラリとツカサの横顔を見上げる。

「あたしの場合は、結局ギリギリだったけどさ」
真っ直ぐに見ると、丁度彼の肩の辺りに視線が向く背の違いだ。
近くに立つと、何時の間にかこんなに身長差がある……
首筋に浮かぶ汗の残りが、窓から入る陽射しにキラリと光った。
小さなホクロが見える。
そうだ。ツカサの首には左右対称の位置に小さなホクロがあるのだ。
サツキは何だか久しぶりにそんな事を思い出す余裕があった。
「お前が港北受けるのは知ってたぜ」
ツカサは窓の外を見つめたまま言った。
港北学園高校。この春二人が入学した高校だ。
「えっ？」
再び彼の横顔を見上げるサツキに、彼は返事をしなかった。
サツキはツカサの少し長めの睫毛を見つめ、光のシルエットに浮かぶ鼻筋に視線を移した。
運河の陸橋に電車が差し掛かると、線路脇の鉄塔を通り過ぎる度に、彼の顔を光と影が横切ってゆく。

駅の大きな時計に西日が反射して、サツキは瞳を凝らす。
暖かい風はタンポポの葉とアスファルトが入り混じったような、少しくすんだ匂いを運んでくる。
駅を出たサツキは下着のカップ数を気にしだしてから、初めてツカサと肩を並べて歩いた。
つまり、小学校以来……中学の3年間は一緒に並んで歩いた記憶は無い。
ただ、下着のカップは幾ら気にしてもそれだけで大きくなる物でもない……
サツキは見慣れた風景の中を歩きながら何かを話そうとするが、唇を僅かに動かしては何度もそれを呑み込んだ。

歩道脇の垣根から出て来た猫が、二人の前を悠長な足どりで横切る。
「おまえ、コンタクトにするのか？」
ツカサは視線で猫を追いながら不意に言った。
「えっ？　な、何で？」
「別に……藤木がそんな事を言ってたからさ」
藤木悠介はサツキと同じクラスの男子生徒だ。誰とでも仲良くなれるクラスのムードメーカーでもある。
そんな彼と、少し前に冗談でコンタクトにするか迷ってるような雑談を交わしたのだ。
そして、藤木はツカサと同じ陸上部。
おそらく部活中の軽い雑談の中ででも、そんな話があったのだろう。サツキとツカサが近所に住んでいる事は彼も知っている。
「う、うん……迷ってるけど……変かな？」
「さあ、自分の好きにすれば」
ツカサは少しぶっきら棒に言った。
サツキは、まったく自分に視線を向けない彼の横顔を見た瞬間、胸の奥がキュッと引き攣ったように苦しくなった。
やっぱりあたしに興味がないのだろうか……それとも、あたしを見るのが嫌なのだろうか……
この時ツカサがもし、冗談でも「コンタクトのほうがイイ」と言っていたら、サツキは有無を言わさず再びコンタクトに挑戦しただろう。
必死で着け外しの練習をしたはずだ。
昔はあんなに仲がよかったのに……何時も一緒にいたのに……
なかなか視線をくれないツカサの態度に、サツキは何時も以上に困惑して俯いた。
暖かい風は、心の中で音も無くただ空廻りしていた。

【3】視線の行方（後書き）

【第４話】メイドとメガネってどういう関係ですか？
更新は３／７未明の予定です。

【4】メイドとメガネってどういう関係ですか？

ゴールデンウィーク最初の休み。
サツキはハルカと一緒に隣町にあるショッピングモールに買い物に来ていた。
南風（みなみ）ハルカも、イズミ同様に中学からずっと仲のいい友達だ。
「イズミは部活だって？」
ハルカがオニューのサンダルの踵を気にしながら言う。
彼女は三人の中で一番背が高く、パッと見は一番綺麗どころだ。
が、実は一番の天然ボケでもある。
「うん。何かね、一年でレギュラーに選ばれそうだって」
「へえ、凄いじゃん」
モールの中を歩きながら、二人の会話が雑踏に流れた。
今日一緒にいないイズミは、ジャズ管弦楽部に入っている。
まだ出来て3年目のその部は、レギュラーのチャンスが多い。
イズミは中学の時クラリネットをやっていた。
サックスが吹きたいといってジャズ管弦楽部へ入部したらしいが、思いの外上達が早くて意外にも期待の新人らしいのだ。
「あの娘、器用だからね」
ハルカはそう言って、アイスクリームの店に視線を向けた。
「そ、そうだよね。イズミって、起用だよね」
コンタクトをスイスイ着け外し出来るのもそのせいだ。きっとそうだと、サツキは思った。
しかし昨日のツカサと歩いた記憶が、サツキの心を焦らせる。
やっぱりコンタクトにするべきなのだろうか……練習すれば、上手に取り外す事ができるのだろうか……
サツキは昨日の彼の言葉と同時に、その時の表情を細かく思い出してみる。
イズミが言った、「メガネはキスの邪魔になる」という言葉が頭

の隅から離れない。
「ねえ、アイス食べよう」
ハルカは一端立ち止まると、サツキの返事も聞かずにアイスクリームの店に向かって歩き出した。

「サツキ、コンタクトどうするの？」
ハルカはコーンに乗った3段重ねのアイスを、ちょっと色っぽい唇で齧る。
二人はアイスクリームショップ前に在る屋内テラスに腰掛けて、雑踏を眺めながら会話を交わす。
「どうしようかな……」
サツキはシングルのアイスを口に着けた。
「メガネがイイっ。て男もいると思うけど」
ハルカは既に二段目のアイスに到達している。
「そ、そうなのかな……それって、商業的に造り上げた流行でしょ？」
「そんな事無いよ。あんたのメガネっ娘ぶりは、好感度あるじゃん」
「メガネっ娘って言うな」
サツキはそう言いながら片手でメガネを触ると、再びアイスに口を着けた。

朱色の太陽が駐車場に並ぶ車の窓に反射している。
買い物が終わって外へ出ると、眩しい夕陽が人波を照らし出していた。
「陽が長くなったよね」
ハルカが空を見上げた。
サツキがそれに応えようとした時、視界の隅から誰かが足早に近づいてくる。

「あの……キミ、高校生？」
ダークなブラウンスーツに身を纏った男は、黒い長髪だった。
今風のビジネスマンっぽくも見えるが、何処か夜の臭いがする。
「えっ？　あ、あたし？」
「そうそう、キミ、メガネ似合うよね。モテルでしょ」
「はあ？」
サツキはきょとんと男を見上げる。
ほっそりと長身の男は、見栄えだけがとりえのような感じだ。
「あの……ナンパですか？　しかもメガネっ娘萌え」
ハルカがサツキの横から覗くようにして言った。
「ああ、ごめんね。きみも可愛いけど、今日はメガネの娘を探してるんだ」
「探してる？」
サツキが応えると、ハルカが「やっぱり、メガネ萌えだ」
苦笑しながら二人を見下ろした男は、胸の内ポケットから名刺を取り出して
「今度駅前にオープンするゲーセンで、サービススタッフのバイトを探してるんだけど、メガネの娘が足りないんだ」
「た、足りないって何？」
サツキは迫る男から一歩下がるようにして、差し出された名刺の角を摘んで受け取る。
『朝霞俊一（あさかしゅんいち）』と書いてある。そして、社名の所には『ファンタジーパーク・時空間』
ハルカもそれを覗き込むと、二人一緒に声を出した。
「ファンタジーパーク？」
朝霞俊一は笑顔のまま
「ええ、アミューズメントパーク。つまり、簡単に言うとゲーセンだね」
彼は両手を軽く組み合わせる動作をして「カフェもあるけどね」
「ねえ、これってメイドカフェじゃないの？」

ハルカが言った「なんか聞いたことある。メイドの格好するんだよ、確か」
「メイド？　ゲーセンなのに？」
サツキがハルカを見る。
「まあ、そんな感じだけど、ゲーセンスタッフだと思ってくれれば」
朝霞が髪をかき上げた。
ハルカは小首を傾げると
「メガネなんて、後で着けさせればいいじゃない」
「うちは、ウソ偽り無しがもっとうでね」
朝霞の長髪が、緩やかな風にはためく。
サツキは一瞬沈黙して俯くと、直ぐに顔を上げ
「あ、あたし、もう直ぐメガネ止めるんです。だから、ダメです」
そう言って駆け出した。
「さ、サツキ」
彼女を追って、ハルカも駆け出す。
男は黒髪をなで上げながら二人を視線で追うと、肩をすくめて再び他の娘を物色し始めた。

【4】メイドとメガネってどういう関係ですか？（後書き）

次回【5】自意識過剰？
は3／8未明の更新予定です。

【5】自意識過剰？

黄昏雲が浮かぶ頭上には銀色の三日月。
西の空は茜色に染まり、雲の波間に太陽は深く沈みかけていた。
最近空港まで開通したモノレールの高架が、黒い影となって田んぼを横切り新しい地平線のように何処までも伸びている。
暮色の景色の中、住宅街の明かりはゆっくりと流れてゆく。
「サツキ、本当にメガネ止めるの？」
買い物帰りの電車の中で、ドア脇の手すりに寄りかかったハルカが言った。
「判んないよ。でも……」
「ツカサ君でしょ？」
サツキは小さく頷く。
「ホントにツカサ君は、サツキのメガネが嫌いなのかなぁ？」
ハルカは携帯のメールをチェックして、それをポケットにしまう。
「だって、全然あたしの顔みてくれないよ」
「だからってさ……」
ハルカは身体の向きを変えて、窓の外を眺める。
「ていうかさ、サツキの事気に入ってる奴、けっこういるんだよ。そっちの方がよくない？」
「けっこうって、何よ。誰よ」
サツキは少し怪訝に尋ねる。
「ほら、3組の田島とか、1組の松川とか」
「全然知らない人じゃん」
サツキの言葉にハルカはちょっと息をついて間を置くと
「あと……藤木……とか」
「藤木？」
サツキは驚いて、思わず復唱する。
誰とでも親しくする藤木は、ある意味異性として捉え所が無いと

いってもいい。
気に入った娘がいるのかいないのか？　そんな事は微塵も覗えないのだ。
「ウソでしょ？　藤木って、藤木悠介？」
「アイツ、入学当初からアンタに気があったみたいだよ。言うなって言われてたから、黙ってたけど」
サツキは正直、悪い気はしなかった。
カッコイイというキャラとはちょっと違うけど、みんなに慕われ、男女共に好感度が高い彼に特別な感情を抱かれている。
今までだって、確かに男の子を意識はしてきた。
ただ、自分の事を気に入っている男子がいると明確に名指しで言われたのは初めてだった。
「そ、そう……」
サツキは呟くように言って、外の風景に視線を向けた。
「一応さ、あたしに聞いたって言わないでね」
ハルカは目を細めて嘆願する。
「う、うん。大丈夫」
でも、こんな事聞いちゃうと明日からどんな風に彼と接すればいいのか困ってしまう。
サツキは、どうせなら聞かない方がよかったのかとも思った。

サツキはハルカに手を振って電車を降りる。
イズミもそうだが、ハルカももうひとつ先の駅の方が自宅に近いのだ。
ひとり駅を出たサツキは、後ろから駆け寄る誰かに声をかけられた。
「サツキ、久しぶり」
中学の同級生、春日弥宵（かすがやよい）だった。
まるでＯＬのようなスリットの無い短めのスカートは、成華女子

高の制服だ。
成和第一高校と並んで、トップレベルの進学校。
「ああ、ヤヨイ。どうしたの？　制服着て……学校？」
「うん、部活」
「ずいぶん帰りが遅いんだね」
ヤヨイは勉強もスポーツも好く出来た娘だ。
中学二年の時にこの町に越して来たのだが、いきなり中間試験で女子のトップを飾ってみんなは度肝を抜かれたものだ。
同じくメガネをかけた娘だったので、サツキは何となく親近感が湧いた記憶がある。
しかし……
「ヤヨイ、メガネやめたの？」
サツキは彼女の以前とは違う顔の一部に気付いていた。
「うん。ソフトボール続けるのに、やっぱり邪魔でさ」
彼女は中学からソフトボール部に入り、ピッチャーをやっていた。
「コンタクト？」
「ううん、レーシック」
「レーシック？」
サツキは初めて聞いたような気がした。
コンタクトレンズの一種なのだろうか……彼女はそう思った。
「知らない？　瞳のレンズをレーザーで修正するんだよ」
「れーざー？　って、レーザー光線？」
「そうそう」
ヤヨイは笑った「なんか、光線って付けるとＳＦ映画の武器みたいだよ」
「痛くないの？」
「麻酔するよ」
「怖くなかった？」
「ちょっとね」
ヤヨイは短い前髪を少し摘んで

「でも、あっと言う間に終わって、それでもう両目1，5だよ」
「入院は？」
「そんなのしないよ。日帰りで充分だよ。東京まで行ったからホテルに一泊したけど」
「東京まで？」
サツキにはビックリする事ばかりだ。
「この辺でもやってる所はあるけど、やっぱり怖いからさ。評判のいい病院に行ったよ。部活の顧問の先生が紹介してくれたんだ」
「なんか、凄いね」
サツキは微かな溜息と共に言葉を発した。
どちらとも無く何となく二人共歩き出して、少し先の交差点まで行くと手を振って分かれた。
サツキは一度だけ振り返って、ヤヨイの後姿を見つめた。
街路灯に浮かんだその姿は、なんだか大人に見えた。

【5】自意識過剰？（後書き）

次回【6】ラストチャンス？
は、3／9夜半過ぎ更新予定です。

【6】ラストチャンス？

サツキは家に帰るとパソコンをネットにつないでレーシックを調べてみた。

コンタクトもメガネもナシで、1，5の視力は魅力だった。サツキも小さい頃は裸眼でその視力を持っていたから。

今日会ったヤヨイは、中学時代よりもずっと可愛く見えたような気がする。

もちろん、成華高校の制服によってあか抜けて見えたのかも知れないが、それだけでは無いように感じたのだ。

しかし……サツキはその治療法を読んだだけで身体が震える。

最近はほとんど無いらしいが、以前は術後に目の異常を訴える患者もいたそうだ。

「ダメダメ、あたしにはできっこないよ」

思わず声に出た。

彼女は気を取り直すと、コンタクトレンズのショップサイトを探して幾つも眺める。

書いてある事は何処も一緒だ。

通販もあるし、いかにもお手ごろ感がある。

誰でも直ぐに装着できるような、そんな雰囲気で、やっぱり明日行こう。そんな気持ちが潮のように満ちたり引いたり……

しかし自分にあった目の矯正タイプを選ぶ機能などを使うと、彼女の場合一発でメガネの項目へ行く。

目に異物を入れたくないのだから、当たり前の事だった。

「サツキ、ご飯よ」

階下から母の声が聞こえた。

サツキは溜息をついてサイトを閉じると、ＰＣの電源を切った。

五月の息吹は慌しく姿を変える。
少し強い風が朝から黄砂を運んで、景色は微かに黄粉色に霞んでいた。
駐車場の車がほんのりと粉っぽく砂を被って、まるで砂漠の戦場で置き去りにされた戦車のように沈黙している。
駅を降りると学校までは緩やかな上り坂になっていて、レンガの敷かれた歩道を登ってゆくと、その先に大きな正門が見える。
サツキは正門前の横断歩道を渡っていた。
十数メートル前方にいるツカサの背中は、既に校門を潜っている。
明日学校へ来れば、あとは４連休。
４連休の間にツカサに何らかのアプローチがしたい。いや、何かしなければ。
そんな思いが彼女の心をかき立てた。一度動き出した気持ちはブレーキが効かない。

お昼休みの校舎のここそこ……
春に出来たカップルは、こぞって連休の計画の話題で賑わいを見せる。
「いいなぁ、遊びに行く連中は。部活もＧＷぐらい休みにすればいいのに」
イズミが教室のベランダに寄りかかって空を仰ぐ。
上空の雲が風に乗ってぐんぐん動いて流れてゆく。
「かわいそう……あたしは連日遊び放題だ」
ハルカがイズミの隣に寄りかかった。
イズミは部活らしいが、ハルカは彼氏とお出かけの予定らしい。
「サツキは？」
ハルカが訊いた。
「あ、あたしは……の、のんびりするかな」
そう言いながら、少し移動して教室の窓側に寄りかかる。
「サツキはＸデーが在るんじゃないの？」

イズミが笑った。
いまひとつピンとこないハルカは「何？　えっくすデーって」
「何でもないよ。何も無い」
慌ててそう言ったサツキは、風にあおられる髪をかき上げた。
「あっ、そうか！」
ハルカが声を上げた。いかにも頭の上に電球が煌いたような笑顔。
サツキの胸が一瞬跳ね上がる。
「サツキ、コンタクト買いに行くんだ」
「いや……うん。どうしようかな……」
サツキはホッとした反面、少しだけ苦笑した。
そんな喧騒に包まれると、サツキの心はいよいよ焦った。
早いうちに手を打たなければ……
思いを告げるとか、コクるとかそんな大それた気持ちなんて無い。
ただ、再び二人で会いたい。久しぶりに二人で出かけたい。
何か小さくてもいいから進展が欲しいのだ。
この前電車で偶然会い、一緒に帰ったのが引き金にもなり、サツキの心は止め処なく焦燥感に煽られ揺らぐ。
しかし……
やはりその前にこのメガネを止めるべきか……
こんなにいても立ってもいられない気持ちになったのは初めてだ。
朝、彼に声をかけることで幼なじみの関係は変わらないと思っていた。
でも、その関係から抜け出したい自分がここにいる。
幼なじみは決して特別ではない……
だから、特別な関係を求めるという事は、幼なじみを捨てなくてはならない。
高校というステージに上がった途端、それは急激に膨れ上がった。
心の中が熱くなって、全身の血潮が騒ぎ立てる。
大人に一番近い子供。
虚ろぐ季節の中で、彼女は確かにそれを感じていた。

【6】ラストチャンス？（後書き）

次回【7】けっこう頑張りました…
は３／１０夜半過ぎ、更新予定です。

【7】けっこう頑張りました…

翌日の朝……
風に吹かれる黄砂も止んで、蒼い空が見上げる彼方に広がっている。
二軒向こうの門扉が開閉される音を、サツキは確かに聞き取る。
何時もとはちょっと違う笑顔で、ツカサに声をかけた。
彼は一瞬驚いて、少し俯いて片手を小さく上げる。
何時もと反応が違う……
彼の曖昧なリアクションは何時もの事だが、何処かが違っていた。
気分？　それともヤッパリ、今日のあたしの姿にちょっと驚いた？
サツキの手は思わず耳の傍に行ったが、今日は掴む物などない。
慌てて手を下ろして独りで失笑する。
ローファーの靴音が何時もより小気味好く響いた。
彼女はツカサの背中を小さく捕らえながら、いつもより胸を張って闊歩した。

「サツキ、ついにヤッタじゃん」
教室へ入ったサツキを見て、イズミが駆け寄った。
サツキは昨日の放課後、再びコンタクト専門店に向った。
この勢いを逃したら、もうありえないと思った。
最後のチャンスだと自分に言い聞かせて、痛みと恐怖に耐えた。
ショップのお姉さんとの会話中、思わずその瞳を覗きこむ。
「あ、あの……店員さんもコンタクトなんですか？」
「ええ、あたしもソフトレンズを使ってますよ」
マスカラが黒々と着いた睫毛を瞬きさせる。
「大丈夫、直ぐに慣れますよ。最近は小学生もけっこう使ってますから」

サツキの決心は変えようが無かった……最後のチャンスと心に決めていたから。
家に帰ってから何度も着け外しの練習をしたが、やっぱり上手く出来なかった。
実は今朝も、装着するのに１０分以上かかってしまった。
取り外す事を考えると、今から気が重い……
しかしサツキはそれを振り切るように
「うん。あたし的には頑張ってみたよ」ミズキに向って言った。
「うんうん、最初は痛いけど、直ぐ平気になったでしょ？」
サツキは笑って「うん、だいじょうぶ。もう平気そうだよ」
「二回目は痛くなかった？」
「初めてに比べればね。まだちょっと変な感じはあるかな」
「なれるなれる」
イズミはそう言って笑うと
「ある意味快感でしょ？　決心した甲斐があったでしょ」
「うん。なんか、世界が変わるよね」
ハルカが丁度教室に入って来て二人のそばへ駆けて来ると、僅かに会話が届いていたのか、いきなり話しに入り込む。
「――そうそう、世界が変わるのは初めての時だけよね」
サツキとイズミは同時に振り返って
「その話、違うから……」

しかし、それを少し離れて見ていた男子がいた。
藤木悠介……
彼は他の男子と昨日発売だったＰＳ３のゲームの話で盛り上がっていたが……
「おい、あいつら何言ってんだ？」

藤木と話していた田畑俊雄が、サツキたちの会話を僅かに聞いて言った。
「あいつら、もうヤッちゃったのかな？」
藤木も一瞬そう思ったが
「そ、そんなの知るかよ」反射的にそう答えた。
詳細はわからないが、そう捉えるような会話だったのは確かだ。
「如月のやつ、メガネかけて無いじゃん」
藤木はひと目見て気付いていたが、田畑の言葉で気付いた振りをした。
「あ、ああ。そう言えばそうだな」
「あいつ、彼氏出来たのかな？」
「さあ、いてもおかしくないだろ」
そんな事を言うのは心苦しかった。
少し前まではいなかったはず……密かに藤木はそんなチェックはしていた。
ただ、急激に距離を縮める可能性のある相手の存在も知っている。
片蔭（かたかげ）ツカサ……
部活の友人であると同時に、藤木にとって密かなライバルでもある。
もちろんツカサの方は、藤木のそんな気持ちは知らない。
ツカサは１００メートルの短距離ランナー。藤木は高飛び選手。
互いに種目がバッティングしないのは、幸いだと思った。
しかしツカサは如月サツキの幼なじみ。
既にアドバンテージがある。
藤木は誰にでも気さくなキャラを、自分自身で時々鬱陶しく感じていた。
そのイメージが、彼女への特別なアプローチを妨げるのだ。
藤木は困惑した笑みを隠すように、田畑に向って
「でさ、お前昨日のゲーム何処までクリアした？」

【7】けっこう頑張りました…（後書き）

次回【8】目の前真っ暗です。
は、一日空きます。
３／１２夜半過ぎの更新予定です。

【8】目の前真っ暗です。

明日から4連休が始まる。
サツキは自分の明るい性格を最大限に生かそうと命イッパイテンションを上げて、彼が部活を終えるのを待っていた。
……胸が躍る。
部活が終わるのを確認してから、駅へ向う。
学校周辺では他の誰に見られるか判ったもんじゃない。
結果がどうであれ、とりあえず知り合いの目に触れない場所で彼に会おう。
彼女は電車に乗って自宅側の駅で降りると、ツカサが帰ってくるのを待った。
こんな時、乗降駅が同じなのは便利だな。と、少しだけ思う。
どれくらい待っただろうか。
サツキが腕時計を見ると、既に3時を回っていた。
今日は全校午前授業だったから、部活が終わる時間も早い。
終わった所は確認して来たから、それから着替えて雑談して……電車の時間からいってもそろそろ来る頃だ。
胃の内側がせり上がってくる感じがして、上手く唾を飲み込めない……
サツキは後ろから伸びるプラタナスの枝先を見上げた。ちょっとだけ、コンタクトの感触が瞳に浮き出る感じがした。
「……来た！」
駅の改札口を出る彼の姿を見て、サツキの胸は高鳴った。
既にテンションは少し下がっているのに、まるで鼓動だけが別の感情を持っているようだ。
そうなると気持ちは怖気づいて、ヤッパリ帰ろうなどと考えてしまう。
ダメダメ……今日言わなかったら何時言うの。今日がチャンスよ

……
サツキは何度も自分に言い聞かせる。
見えないもうひとりの自分が、背中を強く押した。
ツカサは短い前髪を靡かせながら歩いてくる。
駅から出るとタクシー乗り場が横にあって、少し先にタバコ屋が在る。
そこに並んだジュースの自販機の横にサツキは寄りかかっていた。
ツカサが彼女の姿に気付いたのを見て、サツキは意を決して前に歩き出す。
「つ、ツカサ……」
その後の言葉が出ない。
空元気と笑顔……それしかないと思った。
「お、お帰り。今、帰り？」
ツカサはチラリとサツキを見たが、立ち止まらなかった。
彼女は小走りにツカサに並んで歩く。
「あ、あのさ。明日からの連休……暇？」
「部活……」
彼は短く応えた。
部活……そうか、部活あるんだ……サツキはそれを聞いただけで、めげそうになった。
「で、でもさ、映画とか行く暇とかは、少しだけならあるんでしょ？」
ツカサがようやく立ち止まった。が……
「何だよ。何が言いたいんだ？」
何だかこの前もよりぶっきら棒な喋り方だった。いかにも機嫌が悪そうだ。
「な、何って……映画とか……行かない？　一緒に……」
サツキは彼の顔を見上げたが、ツカサは正面を向いたまま微かに眉間にシワを寄せた。
「何処かのイイ関係の男と行けばいいだろ」

ツカサはそう言って、再び歩き出す。
サツキは一瞬動けなかった。
彼の言った言葉の意味が理解できなかったから。
暖かいはずの風が何だか冷たく感じて、まるで液体窒素の海へ浸かったみたいに心の中が途端に凝固して壊れだす。
彼女は足早に彼の前に出て、ツカサの行く手を塞いで停まった。
ツカサは少し驚いた顔で立ち止まるが、すぐに視線をそらす。
「イイ関係の男って何？　どういう意味よ」
「ヤリたくてコンタクトに変えたんだろ」
「何それ？」
ツカサは全く視線を交わそうとせずに、空を仰ぐ。
「そりゃ、メガネじゃいろいろと面倒だもんな。お前がコンタクトにしたかった訳が、やっと判ったよ」
パンッと乾いた音が響いた。
銀杏の木にとまっていたスズメが数羽飛び立って、周囲にいた僅かな群衆が振り返る。
客待ちをしていたタクシーの運ちゃんが、倒したシートに思わず起き上がった。
サツキはツカサの頬を叩いていた。
何も考えられなくなっていた。
全身に冷たい稲妻が走って目の前は真っ白になった。
真っ白な中に、頬を打たれたツカサの顔だけが浮かんでいた。
「何で……？　何でそんな事言うの？」
サツキは彼の言葉を聞かないまま走り出していた。

＊　＊　＊

砕けた……見事に砕けちゃったよ。もう粉々で砂粒だよ……

サツキはベッドの上に制服のまま身体を投げ出して、何時までも天井を見上げていた。
窓から黄昏の夕陽が入り込んで、部屋の壁紙をオレンジ色に染めていた。
言わなきゃよかった……
言って損した……めちゃくちゃ勇気出したのに。心臓が破裂しそうだったのに……
アイツ、あたしの事そんな風に見てたの？
なんでそんな事言うの……？
サツキの心の中は、モヤモヤとしてうっくつした気持ちで満たされた。
もうダメだ……もうこれで、朝の挨拶も出来なくなってしまった……
リスクを含んだ試みだった事をサツキは知っていた。
幼なじみの絆を壊してその先に進む事に失敗すれば、今までの全てを無くしてしまう事は判っていた。
もう彼と言葉を交わす事はないだろう。きっと、二度と無い……
このまま他人となって、残りの高校生活を別々に送るのだ。
サツキは思いつく限りのネガティブな結末を想像して絶望に駆られた。

【8】目の前真っ暗です。（後書き）

次回【9】だって、姉妹じゃん。
は、３／１４未明更新の予定です。

【9】だって、姉妹じゃん。

太陽は沈みきって、カーテンを開けたままの窓際に微かな月影が注いでいた。
薄暗い中に、細く別の光が差し込む。
サツキの部屋のドアが静かに開いて、廊下の明かりが入って来たのだ。
「サツキ？　どうしたの？　具合でも悪いの？」
ゆっくりと足音が近づいて来ると、サツキはベッドの上に起き上がった。
「お姉ちゃん。帰ってたの？」
サツキの姉、ハヅキが立っていた。
サツキよりも5つ年上の彼女は、県庁のある大きな町に就職して一人暮らしをしている。
「うん。連休だしね。さっき着いた」
ハヅキはそう言って笑うと、背中にかかる長い髪をかき上げて
「どうしたの？　何度もノックしたのに返事もないし……電気もつけないで。失恋でもした？」
サツキは胸の奥を覗かれたような思いだった。
「な……そ、そんなんじゃないよ……」
「ふぅぅん」
ハヅキは笑みを浮かべたまま「ご飯の支度できたよ。降りてきなよ」
「うん。今行く」
サツキが少し明るい声を出したのを聞いて、ハヅキは部屋を出て行った。

夕飯を終えると、サツキは久しぶりに姉と話しをした。

昔から何でも話せる面倒見のいい姉だった。
小さい頃ツカサと喧嘩して泣いて帰ると、いつも姉が話しを聞いて慰めてくれた。
サツキはそれだけで気持ちがラクになって、次の日には再びツカサと会う事ができた。
「そう言えば、あんたメガネは？」
ハヅキはコーヒーを口にして言った。
「コンタクトにしちゃった」
「へえ。いいじゃん」
「そうでもない……ていうか、やっぱり止めとけばよかった……」
ハヅキはコーヒーカップをテーブルに置くと
「なんだなんだ？　やっぱり失恋か？」
サツキはオレンジジュースを口にして
「そんなんじゃない。ていうか、それ以前ってカンジ」
「ほほぉ、高校入ってカッコイイ奴でも見つけた？」
「どうだろ……」
その時、風呂場へ向う母親がリビングを通り過ぎる。
「サツキはまたツカサ君と一緒なのよ」
「お、お母さん、余計な事言わないでよ」
二人の会話に、ハヅキの目がきらりと光った。
「あんた、まだツカサ君だったの？」
「な、何よ、まだって。何にもないからね。あるわけ無いじゃん。今までもこれからも」
「あんた、ホント判り易すいよね」
「あ、あたしそんな判り易い？」
ハヅキは再び飲もうとしたコーヒーカップを口から離して
「もう、感情ダダ漏れってカンジ」
そう言って笑った。

ゴールデンウィーク、サツキは姉と過ごした。
去年は何かといえば、イズミやハルカと過ごす事が多かったから、久しぶりの姉妹みずいらず。
サツキは姉がいてよかったと思った。
もしひとりっ子だったら、一人でひたすらモンモンとした日々を送った事だろう。
買い物して街をブラブラして、映画を観て……何だかのびのびと自由な連休だった。
ハヅキは6日の午前中に帰るというので、サツキは駅まで送って行った。
「お姉ちゃんさ、連休に出かける彼氏とかいないの？」
「あははは っ、実は、あたしも失恋したばっかりよ」
「そ、そうなんだ」
ハヅキはプラットホームの風を受けながら蒼い空を仰いだ。
「帰ってきてよかった。あんたといると何も気を使わないね」
ホームに電車が入って来たのを見て「じゃあ、がんばれよ」
「うん。お姉ちゃんもね」
サツキはそう言って大きく手を振った。
何時でも会える距離だが、何だかやっぱり淋しかった。
淋しさが溢れ出さないように、笑顔を絶やさず走り出した電車に向って手を振り続けた。
心の奥が小さく萎んでいくのを感じて、サツキは大きく息を吸った。

サツキがホームを出て改札を抜けると、横から走って来た自転車がすぐ傍で止まった。
「サツキさん？」
サツキが振り返ると、何だか見覚えのある女性がいる。
しかし、彼女はそれが誰なのか思い出せない。

だいたい年配の女性に知り合いなんているか？　誰かのお母さん？　に、してはちょっと若いか？
「覚えてないの？　私の事」
サツキは慌てて思い出そうとする。
「いや……あの……えっと」
「あら……前にツカサ君に会った時には覚えてたわよ」
その言葉でサツキも思い出す。
「あっ、冬月サヤ子先生？」
冬月（ふゆつき）サヤ子はサツキが小学校5、6年生で担任だった教師だ。
当時は25歳くらいで、5年生の担任では一番若かった。
髪型も変わったし少しふっくらして、一瞬では思い出せなかったのだ。
「やっと思い出した」
「なつかっしい！　お久しぶりです」
サツキは思わずピョンピョン跳ねる。
若い冬月先生は多くの生徒から親近感を持たれ、好かれていた。
「落ち着きなさいよ」
冬月はそう言って笑うと「何か、可愛くなって。時間あるなら、少しお茶でもする？」
「うん。ひまひま！」
二人は駅前の喫茶店に入った。

【9】だって、姉妹じゃん。（後書き）

「放課後のプリズム」を読んでいただきありがとうございます。
サツキ・ツカサ・ハヅキ…ちょっと名前表記がややこしいです（苦笑。
次回【１０】屈折…
３／１５・２５時過ぎの更新予定です。

【10】屈折…

窓の外には乗車待ちのタクシーが数台停まっていた。
改札口近くの団子屋ののぼり旗が、穏やかな陽気に緩くはためいている。
サツキと冬月は、すぐ近くにある小さな喫茶店に入った。
「懐かしいなぁ」
サツキは注文を済ませると、そう言って氷の入った水を飲んだ。
「何処か行ってきたの？」冬月が訊く。
「ううん。お姉ちゃんが今日で帰ったから、見送りに」
サツキは、就職している姉が連休中に帰って来ていた事を話して聞かせた。
「そう。連休終わりだもんね」
冬月もグラスの水を少し飲んで
「そう言えば、メガネ止めたの？」
メガネが無くてもひと目で成長した教え子の顔が判るのは、さすが担任教師なのだろう。
「ええ、コンタクトに」
「そう。可愛いわ」
「でもさぁ、取り外すのが大変なんですよ」
サツキはテレ笑いを隠すように言う。
教え子の成長を見る教師の目は、温かかった。
「でも、ツカサ君が残念がるかもね」
「そんな事ないよ。アイツは何も感じないよ」
サツキは少し膨れた顔を見せた。
店員がやって来て、彼女の頼んだアイスアップルティーと冬月が頼んだアイスカプチーノがテーブルに置かれる。
冬月は白い指先でガムシロップをグラスに注ぎながら
「あら？　まだツカサ君とは仲良しだったの？」

「仲良しじゃないです。全然……」
彼女の表情を眺めて、冬月は少し困惑した笑みを浮かべる。
「高校は？」
「同じ高校に通ってます」
サツキは頬を膨らませたままアップルティーのストローに口を着け
「でも、全然話してないよ」
冬月はサツキの膨れっ面を眺めながら懐かしそうに微笑むと、カプチーノにストローを挿した。
微かに氷が音を立てる。
「5年生の時、教室で乱闘があったの覚えてる？」
冬月は穏やか口調で言った。
サツキは一瞬考えて天井を見上げると
「そう言えば、一度だけ凄い喧嘩があったっけ」
「ツカサ君が3人相手に暴れて、机や椅子がみんなひっくり返って」
冬月はカプチーノを飲んで再び笑う。
今となっては微笑ましい思い出なのだ。
「凄かったよね、あれ。その場にいた女子はみんな泣いてたよ」
サツキが頷いた。
「あれ、原因が何だか覚えてる？」
冬月は、いかにも楽しそうにサツキに訊いた。
「そう言えば、ツカサはどうしてあんなに暴れてたんだろ」
壮絶な現場の記憶は在るが、その原因などは全く覚えていない。
Tシャツの袖が破れたツカサの幼い姿だけが、サツキの記憶に蘇える。
原因についての記憶が定かでないのも無理はない。ほとんどの生徒は、あの時の明確な原因を知らないのだ。
「ほら、サツキさんを教育ババアとかメガネババアとか言ってた男子がいたでしょ」
それを聞いたサツキは、咥えかけたストローから口を離す。
そうだ……ツカサが掴みかかっていたのは、確かにそんな連中だ

った。
「メガネの何処が悪い。そう言って掴みかかったみたいよ」
「そ、そうなの？」
「彼、案外あなたのメガネ姿が好きだったのかもね。だから、普段の彼らの態度を見かねたんじゃないかしら」
「そ、そんな……ていうか小学生でメガネ萌え？」
冬月は静かに笑ってカプチーノを飲む。
「実際あなたのメガネ姿は似合ってたし、可愛かったわよ。悪口言ってからかってた彼らも、本当はあなたのメガネ姿にキュンときてたのかもね」
「ええっ？　そんなぁ……ありえないよ」
サツキは困惑した笑みを浮かべて何度も瞬きした。
「あのクラス、メガネかけてる女子は他にいなかったし」
「そう言えば、あたしだけだった」
冬月はストローでカプチーノに浮かんだ氷を玩ぶと、一瞬落とした視線を再びサツキに向けた。
「裏返しって、あるじゃない」
「裏返し……？」
「人の心ってなかなか気持ちが真っ直ぐ反射しないのよ。ほら、３角プリズムみたいに」
「プリズム……？」
サツキは理科の実験で使ったそれを思い描く事ができた。綺麗な三角柱のクリスタルだ。
冬月は続けた。
「恥ずかしさやヤキモチ。プライドや周囲の視線……色々な感情が邪魔をして、気持ちが屈折しちゃうのね、きっと」
「気持ちが屈折……」
サツキは呟いた。
心の屈折？　裏返し？
ツカサが目を合わせなくなったのは、そんな事が理由だったのだ

ろうか……照れくさくて真っ直ぐ見れなくなった？
そんな……そう言うものなの？
サツキは無言でアイスティーを飲み干した。

【１０】屈折…（後書き）

【第１０話】を最後まで読んでいただきありがとうございます。
次回【１１】だって時間は戻らないでしょ。
は、１７日深夜２５時過ぎ予定です。

【11】だって時間は戻らないでしょ。

電車の中には半袖姿も目に付いた。
五月の陽射しはもう夏空のようで、眩い太陽がジリジリと紫外線を照りつける。
「どうしてあたしたちが教室で初体験の話するのよ！　あんたバカぁ？」
連休明けの朝の教室に、イズミの声が響いた。
一瞬クラスの連中が振り返ったのを感じて、彼女は慌てて声のトーンを落とす。
「そんな話し、男のいる教室でするわけないでしょ。何考えてるの？」
イズミにダメ出しされているのは、藤木だ。
こうなっては、普段の好感度もガタ落ちだった。
彼は連休前に聞いたサツキやイズミの会話を初体験の話しと解釈して、部活での雑談中にツカサにも話してしまった。
何気にサツキの相手はツカサだと思った。
藤木は半ばツカサに負けたのだと思ったのだ。
それを吹っ切る為に、真相を訊きたい気持ちでさり気なく切り出した話だった。
彼だけが勘違いしていたのならイズミもこんなに目くじらたてたりしない。
問題は、藤木が自分の勘違いをツカサに話したと言う事だ。
当然のように、藤木の話しにツカサは思い当たる事もない。
誰か知らない奴と……
それが、彼の不機嫌の原因なのは言うまでもないだろう。
サツキが誘った時の彼の態度の全ては、この事に要因があったのだ。
「どうしてツカサ君に話すのよ。確信も無いくせに」

藤木は困惑して冷たい汗をかいていた。
「いや……ちょっとした雑談だよ。そんな深刻な会話じゃなかったんだ」
女子にこんなに責め立てられた事など初めてだった。
「それに、てっきりツカサと如月（きさらぎ）は上手くいったのかと思ったし……」
藤木はひたすら苦笑するしかない。
「それはアンタが心配する事じゃないでしょ」
「わ、悪かったよ……」
藤木の気持ちを知らないイズミは、藤木を必要に責めた。
「藤木もさ、悪気はなかったんだよ」
ハルカはイズミを宥めるように言うと、藤木を見て肩をすくめた。
「この分だと、サツキは悲惨な連休だったでしょうね……」
イズミは連休前にサツキが勝負に出る事を知っていた。Xデーと言ったのがそれだった。
連休を使って距離を縮める決意を聞いていたのだ。
彼女が溜息をついた時、サツキが教室へ入って来るのが見えた。
藤木から離れたイズミが彼女に駆け寄る。
「サツキ、大丈夫？　メールくれれば遊んであげたのに」
「な、何よ。いきなり」
「ツカサ君、何か言ってたでしょ」
「な、なんでよ？」
イズミは教室の隅へサツキを促すと、藤木の事を話して聞かせた。
サツキはイズミの話しの勢いに目を丸くして聞いていたが、説明が終わると思いの外軽く笑って
「何だ、そうだったんだ」
サツキは、先日のツカサの極端な態度の意味をやっと理解して安堵した。
もちろん、上手く行かなかったのは事実で、現に今朝は彼の姿を見なかった。

ほとんど毎朝家の前で見かけたのに、急に見かけなくなったという事は、きっと家を出る時間を変えたのだ。
でも、気まずい気持ちで顔を合わせるよりいいと思った。
それでいいのだと、自分に言い聞かせた。
「ツカサ君には、藤木から説明させとくからさ」
「いいよ、別に……」
サツキは何となくどうでもよかった。
連休前のあの日が、もう一年くらい前の出来事のように思えて、今は何も感じない。
というより、どうやってもあの時間、あの瞬間は戻ってこないのだ。
もう、やり直しは効かないのだと思った。

＊　＊　＊

リズミカルで速いスパイクの音が、１００メートルの直線をあっと言う間に走りきる。
爽やかな息が弾む。
ツカサは息を整える為に大きく呼吸をしながら腰に手をあてて、上空（そら）を仰いだ。
長い飛行機雲が、音も無く細く伸びている。
ソフトボール部の少し甲高い掛け声が遠くで聞こえた。
汗の伝う頬を穏やかな風が撫でて通りすぎる。
「ツカサ……あのさぁ」
藤木が駆けて来ると「帰り、時間あるか？」
「なんだよ、あらたまって」
「いや……如月の事でさ……」
藤木は少し短めの髪をクシャクシャとかきむしった。

彼を見ていたツカサは、取り出したスポーツタオルを顔に当て、再び空を見上げた。
「なんだよ、その話はもういいって」
「いや、違うんだ……俺、勘違いしてたみたいでさ……」

【１１】だって時間は戻らないでしょ。（後書き）

次回【１２】『ラ』の音色
は、２０日未明前に投稿予定です。

【12】『ラ』の音色

放課後の校舎に西日が差し込むと、教室に並んだ机はモノトーンのオブジェのような陰を映し出す。
特別教室の並ぶ4階で、サツキはふと足を止めた。
静けさで満たされた廊下に、ピアノの音色が染み出るように聞こえてくる。
どこかで聞き覚えのある曲だ。
ショパン……夜想曲・第二番。
穏やかで緩やかで、ちょっぴり悲しい曲……
「誰だろ……先生は職員室にいたよね……」
サツキは曲名など知らないが、胸の内を潤すように響くその音に導かれながら音楽室へ近づいた。
吹奏楽部は3階の空き教室を使っているし、ジャズ管弦楽部の音は聞こえてこない。
音楽室のドアは開いていた。
サツキは開いたままのドアをそっと覗きこむ。
大きなグランドピアノが窓際に置いてあって、それを弾いている生徒の横顔が見えた。
イズミ……？
綺麗な音色を奏でているのは　涼風イズミだった。
サツキは彼女の横顔に、胸の鼓動が緩やかに高鳴るのを感じた。
鍵盤に視線を落とすイズミの仕草は、普段見る事の無い清楚な色気に満ちていた。
窓から注ぐ西日が、彼女のシルエットの周りにぼんやりと光の輪郭を造り出して、天使のように輝いていた。
「誰？」
イズミが人の気配に気付いて、演奏を止める。
サツキも思わずビックリして息を呑み、ただ立ち竦んでいた。

イズミは振り返った瞬間に、ドアの前に立つ彼女を認識した。
「なんだ、サツキか……ビックリした」
サツキは音楽室へ入ると「イズミって、ピアノも弾けるんだ」
「うん、小学校の頃少しやってたから」
少しと言うには、かなり本格的な音色だった。
「部活は？」
「今日はナシになった。3年が進路指導で、2年は修学旅行の準備だって」
「吹奏楽はやってるよ」
「自主連でしょ。みんな熱心だから」
イズミはそう言いながら、鍵盤の端を人差し指で軽く弾(たた)いた。
零れるようなラの音が響いた。
「サツキは？　どうしたの？」
「あぁ、あたしは明日の準備でちょっと……」
「あっ、あんた今週、週番かぁ」
サツキはピアノの前を通って、窓から校庭を見下ろす。
ソフトボール部の金属バットの音が鳴り響いた。
この学校は何故か、男子の野球部よりも女子のソフトボールの方が盛んだ。
グラウンドを使っている運動部の数も、何時もより大分少ない。
何処も、2，3年生が欠けている為だ。
陸上トラックを走るツカサの姿が見える。
それは、以前よりもずっと小さく遠くに見えた。
コンタクトを着けた瞳の奥が、ほんの少しだけ滲むように熱くなった。
サツキは小さく息をつくと
「イズミは何でも出来ちゃうんだね」
「何それ？」
「だって……」

イズミは静かにピアノのフタを閉じると
「そんな事無いよ。５０メートル走は、サツキの方が速いじゃん」
「そんなの、何の意味も無いじゃん」
「バスケだって、あんたの方が上手だし……あたしは球技とか、運動そのものが苦手だからサツキが羨ましいよ」
イズミは立ち上がると、サツキと並んで窓の外を見つめた。
陽射しが眩しくて目を伏せると、丁度ツカサの姿が目に入る。
「あれから、ツカサ君と話しした？」
「ううん」サツキは小さく首を横に振って
「もともと、話しとかしなかったから……」
「そっかぁ……でもさ、昔は仲良しだったんでしょ？」
「昔はね」
サツキは窓枠に両腕を乗せると、そこにアゴを乗せた。
「あたしも何かパッとした特技とかあったらなぁ……」
アゴを乗せたまま喋る彼女の頭が、言葉に合わせて小さく揺れた。
「きっと、隣の芝は青く見えるんだよ。あんたの芝だって、充分青いんだよ」
イズミはそう言って、微笑んだ。
「そうなのかなぁ……」
「そうだよ」
「うぅん……」
気流に乗っていたトンビが上空の風に煽られながら急旋回して、ゆっくりと４階の窓の近くを滑空しながら風切り羽を器用に調整していた。
浮遊するそれを、イズミは目で追った。
サツキはぼんやりと校庭を眺めながら、少しの間考えていたが
「あっ、ヤバイ。週番の仕事忘れてた」
そう言って身体を起こす。
「あたしも帰るから、待ってようか？」
「うん。すぐ済むから」

サツキは隣に在る準備室のドアを慌しく開けた。

【１２】『ラ』の音色（後書き）

『ラ』の音は、最後から３番目。
放課後のプリズムもラストまで、あと２話＋エピローグです。
次回【１３】ピンチなんです。
は、２２日未明前に更新予定です。

【13】ピンチなんです。

もう、朝に彼の姿を見る事は無かった。
ほとんど毎朝見かけて、その度に声をかけたツカサの姿は無い。
二軒隣だ。
少し早く家の前に立って、彼の出かける姿を待ち伏せするのは簡単だ。
しかし、サツキはそれをしようとは思わなかった。
藤木がツカサに言ったサツキの事は訂正され、誤解は解けた。
しかし、だからといって二人の仲が急に進展する物でもない。
サツキがツカサの頬を叩いた事実は変わらないし、ツカサが彼女に酷い事を言ったのも事実なのだ。
誤解が解消されても、時間が戻るわけではない。
再び二人が微妙な距離に戻るキッカケは無く、時間だけが過ぎていった。
遠くの人が近づいて来たり、近くにいた人が遠くへ行ってしまったり。
大人になるという事はきっと、そう言う事の繰り返しなのかも知れないとサツキは思った。

乾燥した大氣を潤すような春雨が、2日前から降り続いていた。
今朝は久しぶりに陽が射し込んで、家の近所に植えられた青々と葉の茂った桜から零れ日が注いでいた。
それでも午後には再び厚い雲が頭上を埋め尽くして雨が降り出し、黒々とアスファルトを色づける。
「ツカサ、お前あれから如月と話ししたか？」
「してねぇよ。ていうか、もともと話しなんてしてないし」
藤木とツカサの二人は校舎の階段を1階から4階へと駆け上がっ

て、反対側の階段から再び1階まで駆け下りる。
雨の日、特例で放課後の部活でのみ廊下をランニングすることができるのだ。
「何でだよ。幼なじみなんだろ？」
藤木は階段で息を切らせながら訊いた。
「昔はな……」
「幼なじみって、ずっと幼なじみだろ？」
「そうなのか？」
ツカサはそれほど息があがっていない。
「俺に訊くなよ」
藤木が切り返すと
「俺だって知らねぇよ」
ツカサの一階まで駆け下りるペースが上がった。
藤木も負けずに走った。
一階まで下りると彼は
「じゃあ、俺はこれで上がるからさ」
そう言って立ち止まる。
「はあ？　もう？」ツカサは足踏みしたまま留まって、藤木を見た。
「俺は瞬発力だけで充分だからさ」
藤木は息を整えながら軽く手を上げて「じゃあな」
ゆっくりと階段を上って行った。
ツカサは彼を視線だけで追って階段を見上げたが、独りで再び走り出した。

放課後の教室はほの暗く、影に包まれていた。
ツカサは廊下のランニングを終えて、着替える為に自分の教室へ戻って来た。

雨の日の部活はほとんど自主トレに近いから、そんな日は教室で着替える連中も多いのだ。
校庭の隅にある部室長屋に行くと、それだけで雨に打たれてしまう事になる。
帰り際、彼はサツキの教室の前を通りかかって、ふと足を止めた。
暗い教室の中に人影が見えたから。
一瞬藤木かと思ったが、彼があがってからもうずいぶん経つ。
「サツキ……？」
「待って、入らないで！」
ツカサは教室へ入ろうとして、その足を止めた。
彼女は何をやっているのか……？
「おまえ、何やってんだ？」
サツキは教卓の横で膝をついて、這いつくばるように床に顔を近づけている。他に人の気配は無かった。
「コンタクト落としちゃったぁ……」
彼女は床をジッと見つめたまま嘆くように応える。
彼との気まずさを感じる余裕も無かったようだ。
ツカサは小さく肩をすくめると、ゆっくりと教室へ足を踏み入れた
「入るぞ」そう言って教室の電気を点けてやる。
「あ、待って、こっちに来ないでよ」
彼女が慌てて振り返る。
「ソフトレンズは落ち難いんじゃないのか？」
「今、転んだら片方落ちた……」
ツカサは微かに擦りむいたサツキの膝に気付いた。
「しょうがねぇな……」
彼は再び肩をすくめると、息をついてゆっくりと屈んだ。
「こんな時間に何してたんだ？」床に目を這わせる。
「今週、週番……」
サツキはふと振り返って「なんであたしがソフトコンタクトだって知ってるの？」

「えっ？　いや……お前はどうせハードコンタクトじゃ痛くてダメだったんだろ」
「な、なんでよ」
「だっておまえ、痛がりじゃん」
ツカサはそう言って直ぐ、サツキの素足を掴んだ
「待て、動くな」
「な、何。こんな所で……しかもドサクサ？」
ツカサの手の感触が、素足の脹脛（ふくらはぎ）にジンと熱く伝わった。
彼は空いたもう片方の手を床に当てると
「あったぜ。これだろ」
ツカサの指先には、確かにコンタクトレンズが乗っていた。
「あった。ありがとう。もう、どうしようかと思ったぁ。なくしたら半額出さなきゃスペア買えないし……でも、もうお金ないし……」
サツキがコンタクトを手にそう言っている間に、ツカサは立ち上がって教室を出ようとしていた。
「つ、ツカサ！」
「ひざ擦りむいてるぞ。じゃあな」
サツキは、廊下にしっとりと響く彼の足音をしばらく聞いていた。
それが階段の向こうへ消えるまで。

【13】ピンチなんです。（後書き）

次回【１４】五月雨は何色？
は、２４日未明前更新予定です。

【14】五月雨は何色？

サツキが昇降口へ来た時、外に人影が見えた。
この学校の昇降口には出入り口の仕切りや扉はない。
彼女はハッとして立ち止まる。
後姿で直ぐにそれが誰かは判った。
胸の中が途端にざわついて、鼓動が高鳴る。
履き替える靴をその場に置いたまま、サツキはカバンの中を探りながら一階のトイレに駆け込んだ。

雨は止むどころか、少しずつ強さを増していた。
静かな雨音が小さな喧騒に変わっていた。薄暗い景色に、街路灯が灯を燈している。
ツカサは昇降口の庇の下に立って、ただ何となく物憂げに沈んだ空を見上げ、ひたすら降り注ぐ雨を見つめていた。
真正面の花壇で、咲きかけのあじさいだけが色鮮やかな雫を落とす。
庇から滴り降りる水滴が、ツカサの足元に何度も落ちてきた。
乾いたタイルに微かな足音……彼に近づく人の気配。黄緑色の傘がツカサの上に差し出された。
湿った空気の中で、彼は何だか懐かしい匂いを嗅いだ気がした。
「傘、持ってこなかったの？」
ツカサは振り返ることなく
「朝は晴れてたぜ」
「バカね、今日も明日も雨だって、天気予報で言ってたじゃん」
サツキは笑って「ああ言うのを、五月雨の木洩れ日って言うんだよ」
「ふうん。でも五月雨って、普通6月じゃないの？」

「えっ……そ、そうか、そうだね」
サツキが苦笑して「やぁね、細かい事言わないでよ」
そこでツカサは振り返って彼女を見ると少し驚いたが、それを悟られまいと、直ぐに視線をそらして遠くを見つめる。
「おまえ、コンタクトどうしたんだよ。さっき見つけてやったろ」
「うん。面倒だから、今日はいい」
サツキは庇の雫を見上げて
「ていうか、やっぱりコンタクト止めようかなぁ」
「なんで？　高かったんだろ？」
彼女は小さく頷く。
「うん……お年玉の貯金なくなった」
「バカだな」
視線は合わせなかったが、ツカサは確かに笑った。
「だって……でも、やっぱりメガネの方がラクじゃん」
サツキはそう言って、レンズ越しに微笑むと
「傘、入ってく？」
「しょうがねえな」
ツカサは無造作にサツキの手から傘を掴むと、先に歩き出した。
「ちょっと、先に行かないでよ」
彼女も慌てて歩き出す「あたしの傘なんだからね」
「いいじゃん、どうせ帰る先は一緒なんだし」
「少しは感謝してる？」
「今日は選択の余地がないからなぁ」
ツカサはそっぽを向いて言った。
「何よそれ」
「ていうか、コンタクト見つけてやったの俺だろ？」
「あっ、そうだっけ？」
サツキがとぼけた素振りで言うと
「かわんねぇな、おまえ」
ツカサはそう言って再び笑う。

サツキもつられる様に、ここぞとばかりに明るい笑みを見せた。
冷たい春雨の隙間をぬうような、暖かい風が吹き抜けた。
傘に当たる雨音が、二人を一瞬沈黙させる。頭上を埋め尽くす雨雲はゆっくりと流れてゆく。
すると、雲の切れ間から突然陽の光が注いだ。
相変わらず降り続ける雨に陽の柱が反射して、淡雪のように白く輝いた。
光は乱反射して、小さな虹を作り出す。
それは微かに見える、限りなく透明に近い虹だ。
二人は思わず立ち止まる。
「あ、虹だ……」
「ああ……本当だ……」
その瞬間、陽射しは再び厚い雲に遮られて辺りは暗くなった。
一瞬で消えた虹に、サツキとツカサは互いを自然に見つめた。
ほんの一時（いっとき）の事だった。
そして不意に恥ずかしさが込み上げて、二人とも慌てて目をそらす。
こんなにはっきりと見つめ合ったのは何年ぶりか、サツキには思い出す余裕などない。
「ご、ごめんね。この前……」
「何が？」
「叩いた……事……」
サツキは俯いて、少し濡れた自分のローファーを見つめる。
まだ真新しいそれは、弾いた雫が甲の部分で光っていた。
「ああ、平気だよ」
ツカサは一瞬彼女を見て、直ぐに視線を逸らし
「でも、痛かった……つうか、スナップ効き過ぎなんだよ、おまえ」
「そ、そんな事……だいたいツカサが変な事言うからだよ」
サツキは慌てて言い返す。
「藤木が言ったんだぞ」

「信じる方がバカなんだよ」
「俺だって焦ったさ……」彼は呟くように言った。
「えっ？」
「何でもねぇよ」
「何よ」
サツキはあまりにも自然に、彼の腕に自分の肩をぶつけた。
少しよろめく素振りをしたツカサは
「じゃあ、今度映画でもおごってやるよ」
「ええっ？　それってデートの誘い？」
「そ、そんなんじゃねぇよ。金無いって言うからさ……義理だよ。義理。つうかボランティア」
「義理？　ボランティア？」
サツキはちょっと頬を膨らませるが、それを笑顔に変えて
「仕方ないなあ、義理に付き合ってやるか」
濡れそぼるアスファルトに、再び二人の足音が動き出した。

【１４】五月雨は何色？（後書き）

次回はエピローグです。
２６日未明前に更新予定です。
どうぞお見逃し無く（＾＾

【エピローグ】

サツキはキャミソールの上に、前開きの白いカットソーを着て鏡の前に立つと、ビューラーで睫毛をカールした。
薄っすらとマスカラを塗る。
塗りすぎるとメガネのレンズに擦れてしまうので注意が必要だが、今ではカンで適量が判る。
買ったばかりのアナスイのフレグランスをさり気なく身体に振り掛けると、ストロベリーの甘い香りが彼女を包んだ。
「よし」
玄関を出ると、蒼い陽射しがUVカットレンズを通してサツキの瞳を照らす。
「おそいよ」
門を開けると、植木の陰で見えない場所に、ツカサが自転車に乗って待っていた。
彼の視線はサツキのメガネのレンズを真っ直ぐに通り抜けてくる。
「女は仕度に時間がかかるの」
サツキはそう言って後ろの荷台に横乗りで腰掛けて
「しゅっぱぁつ」
笑顔でそう言った。
ツカサがペダルに足を乗せると、自転車が動き出す。
彼女はツカサのシャツの脇の部分を摘むように掴んだ。
普段あまり使わない彼の自転車は、ペダルをこぐ度にキーキー音を立てる。
「なんか、ビンボー臭い音がする」
「仕方ねぇだろ。普段使ってないんだから」
ツカサは振り向かずに言った。
「なんで？　何時も駅まで自転車使えばいいじゃん」
「駐輪場めんどくせぇ」

「ものぐさねぇ」
サツキは風ではためく彼の背中を笑顔で見つめた。
「お前だって駅まで歩きじゃん」
ツカサは僅かに横を向いて、後に視線を向けた。
「あ、あたしは……」
サツキは言葉を詰らせて少し俯くと、小さな声で
「あんたが、歩くからじゃん……」
「はぁ？　なに？」
彼女の声は風で後へ飛んで、ツカサには届かなかった。
サツキはツカサの背中を叩いて「何でもない。ナイショ」
プラタナスの木から落ちる黄緑色の木洩れ日の中を通ると、暖かい風が頬を滑り抜けて肩に着く髪を靡かせた。
もう直ぐ梅雨入りと天気予報では言っていたが、毎年感じる湿った憂鬱さは無い。
それは背中に感じるぽかぽかとした陽射しのせいだけではないだろう。
サツキは目を細めて、風が運んでくる緑と土の匂いを嗅いだ。
「なあ？」
ツカサが頭を起こしてほんの少し振り返る。
「なに？」
「おまえ、今朝果物でも食べてきた？」
「なんで？」
「なんか、イチゴの匂いしない？」
「ばぁか」サツキは再び彼の背中を叩いた。
駅では心地よい陽射しを受けたお昼寝タクシーの横を、今日も僅かな人波が通り過ぎてゆく。

……

……
……

「お母さん、あたしコンタクトにしようかな」
「どうしたの？　ツバキ、目にモノを入れるなんてイヤだって言ってたじゃない」
「うん……でもさ……」
「なに？」
サツキは、この春中三になったばかりの娘を見て微笑んだ。
近視は彼女に似てしまったようだが、通った鼻筋は明らかに父親似だろう。
「うん……いろいろね……」
「ツバキはメガネが似合うと思うけどなぁ」
「そんな事無いよ。それは、親だからそう思うんだよ」
ツバキは前かがみになると、ダイニングテーブルにくっついてアゴを乗せた。
「そう？」
サツキはテーブルに肘を着いて
「意外と武春（たけはる）君も、ツバキのメガネ姿を気に入ってると思うけどなぁ」
「そ、そんな事無いよ」
ツバキは軽くテーブルを叩いて顔を上げた。
少し紅潮した頬で息をつく。
「そんな事ない……最近あんまり話ししないし……なんか避けられてるカンジ……」
サツキは微笑んで、お茶の入った湯飲みを手にすると
「人の心って屈折して折れ曲がるからさぁ……わかんないものよ」
いかにもやゆした言い方をする。
「そうかなぁ……」

「そうよ」
サツキは何かを思い出すようにふっと笑い
「特に男の子の心の中にはね、プリズムが入ってるから」
「プリズム？」
ツバキは大きな目を丸くしてパチパチと瞬きさせた。
サツキは湯のみをテーブルに置くと
「まあ、ツバキの好きにしなさい。お金は自分で出してね」
そう言って優しく微笑む。
「お母さんは、ずっとメガネなの？」
「うん……そうね」
「面倒とか、邪魔だとか思った事ない？　メガネじゃなかったら、もっとモテるとか思った事ない？」
「……ない……かな」心の中で苦笑した。
「ふぅ～ん」
ツバキは立ち上がってポットから急須にお湯を入れた。自分の湯飲みにお茶を注ぐと、母親の分も注ぐ。
椅子に腰掛けながら熱いお茶をそっと啜って
「あたしも、もう少しこのままでいいや」
玄関のドアが開く音がした。
既に夕飯の準備は出来ていて、あとはテーブルに並べるだけだ。
「あ、お父さん今日は早いね」
その足音がダイニングへ入ってくると、サツキは腰を上げて
「お帰りなさい。今日は早いのね」
メガネに手をそえながら、ツカサに何時もの笑顔を向けた。

⋮E
N
D⋮

【エピローグ】（後書き）

放課後のプリズムを最後までお読み頂き、有難うございます。
『はじめてのコンタクト』と謳いながらこの話し、実はコンタクトが中心と言うより、メガネをかける女性の心情の変化を綴ったものでした。
企画の趣旨の一部に沿って、奇抜な内容や過激なキャラは避け、ごく日常のありふれた情景を心がけました。
連載中、沢山のアクセスをいただき、有難うございました。
企画小説という事で、ラストはほのぼのとまとめたのですが、いかがだったでしょうか。
何かを思い出した時、是非また読んでいただけたら嬉しいです。
本当に有難う御座いました。

追記
この度、企画の中で二つの賞をいただき、そのコメントの中にあった誤字を修正させていただきました。
誤字はまだ在るかもしれませんが、それも承知で最後まで読んでいただいた方々には大変感謝いたします。

ｔｏｋｕｊｉｒｏｕ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7719d/

放課後のプリズム

2010年10月8日12時53分発行